

審査の結果の要旨

氏名 高野香子

本論文はアンコール解体後の15世紀から、フランス植民地化直前の19世紀中葉までのポスト・アンコール時代といわれるカンボジア史を専論した画期的な論文である。

本論では、第一にアンコール史とポストアンコール史の断絶を強調し、第二にポストアンコール期にはカンボジアが平原部を基盤とし、シャムと関係する王権と、東部メコンデルタに依拠しベトナムと関係する二つの王権が存在したことを論証し、第三にカンボジア各地域の地域史を明らかにし、中央との関係に大きな相違があることを示した。第四にこれらの分立した地域が19世紀中期のアンドゥオン王の時代に、王都ウドンを中心とするネットワークが再編されたことを論証した。

本論は各種カンボジア年代記を、オランダ資料、フランス資料、日中資料、そしてベトナム資料と比較考証し、また広くカンボジア各地域を調査して口述資料を渉猟し、これまで唯一の資料であったカンボジア年代記を相対化し、その資料性を明確にしたものであり、今後カンボジア史の基礎となる業績といえよう。同時にカンボジア諸地方の地域性が植民地直前には統合する方向にあったことが示され、これまでのカンボジア史のあり方に根本的な批判を加えた点において、大きく評価しうる。

たしかに論文としての構成、また論文題名の「回廊」の概念などに、いまだ未熟の要素が多々みられが、なお本論の画期的な意義を損なうものではないと考える。よって審査委員会は本論が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。